

一 親縁、近縁、増上縁

如來様のお慈悲が、餘りに深すぎると、用意が餘りに周到なとで、却てその存在をすら、疑ふものがあります。是は恰も母に抱かれて居ながら、而も母を求むるやうなもので、現に抱かれてゐる母を措いて、他に別に母を求めやうとしたとて、母が得られる譯がありません。又、たとひ眞實に親を求むる心があるにしても、それは、闇の夜に鳴かぬ鳥を捕へるやうなものである。私共も、佛を求め探すといふ、何ぞ見覚えでもあるのか。見覚えが目印がないのならば、いくら尋ねたかとして、よしんば、互に袖を振り合せたかとしても、それを知ることには、出来ないではありませんか。既に見覚えがあるといふのなら、強てその存在を確かめる必要もありますまい。親は子に離れない、子は親に離れないのですから、子のある所には必ず親があり、子のあるのが、即ち親のある證明であります。子は一人で居ても、一人で置かぬのが、親の慈悲であることを忘れてはなりません。お經には「群生を荷負して之を重擔と爲す」と説かれてあります。今私共は、現に如來の親様に荷負せられ、抱かれ獲られて居るのであります。

中には宗教は要らぬものだ、如來様は無いものだ、など申すものがあります。これは至つて亂暴な言草で、親などあるものでない、私には親は要らぬのだと、云ふのと一般で、頗る舊式な、明治時代のチヨンマゲ思想であります。成程、子供も達者な時、玩具に性根をとられてゐる時は、直接親は無くとも濟ませうけれども、一朝にして病氣になるとか、玩具に厭いたとかすれば、忽ちに親を求め、親がなくてはならぬことになります。加之、達者に遊んで居られるのは、全く親の念力のある御蔭なのであることに、氣付かねばならぬ。

さればとて、如來の救濟を以て、要らぬ御世話のやうに心得、餘りおせつ
かちの様に思ふ人がないではない。併し、親となつては、飽まで子供の世話
をやかねばならぬ。面倒を見ねばならず、始末をしてやらずに、居られるの
であります。

阿彌陀様と私共とは、眞實の信を以て結ばれた、眞實の親子であります。
親縁、近縁、増上縁切つても切れぬ、深い強い因縁が結ばれてあります。そ
れ故、如何しても、念佛の衆生を攝取して捨てることが、出来ない。我身を
犠牲にしても、子のため盡さずに居られぬのである。産着は嬰兒の生れぬ先
から用意せられ、乳はちやんと出来て居るのであります。嬰兒が生れぬ先か
ら心配して、さて俺はぢきに生れるが、生れたら、何を着、何を食べやうか
この腕を磨き、この脚を働かして、甘く人生の難關を切り抜けやうなど、そ
んなことを氣張つて居るでしやうか。恐らく、生れ出る世界がどんな處か、
どんな物があるかさへ、知らず辨へないのでしやう。焉んぞ知らん、生れた
後ばかりでなく、生れぬ前から一々これが親のお蔭ではありませんか。その
間に於ける親の苦勞心痛は、一通りではなく、全く命がけであります。
常に仁義忠孝の道を説き立て、數多の門弟を教授する律儀一遍の儒者。
道學先生と諱名された人が、南向の窓に向つて、熱心に讀書してゐます折柄
窓の下で銅羅聲を張り立て、頻に悪口するものがある。間にはハ、と嘲る
やうな婀娜しい聲もする。道學先生、何事かと耳を澄ませば「イヤ此奴腐つ
て居るから不可ませぬ、如何しても子の方が好うがす、親は大きいばかりで
仕方がありません、中には腐らないものもあります、我利々々で役には立ち
ませぬ」。「そどうすな、矢張り子の方が好うおます」なんて、盛に親々と、
親を罵り子ばかり褒めてゐます。先生、癩に觸つて堪まらない。「如何に世は

澆季とはいへ、末法とはいへ、俺があれほど、毎日道を説き聞かして居るのに、大切な親たるものを我利々々の、腐つて居ると、怪しからぬ次第や俺の講義を何と聞き居る。斯る不埒な奴があるから、聖人君子の道が行はれぬ。言語道斷、己れ！どうして呉れやう。障子がらりと引開け、木太刀とつて、窓下を覗まへれば、隣の女房さん達が、里芋を買うて居るのであつた。先生ギツクリ行き詰まつた。成程これでは悪く云ふ筈だ。俺とても、矢張り子芋が甘しい。流石は先生、忽ち一首浮かんた。

芋を見よ子に榮えよと親瘠せて、斂うなつたり甘くなつたり

如何にも左様ぢや。子芋が甘しいとて、人に珍重されるのは、全くこの斂うなつたり甘うなつたりして、自ら瘠せつゝ、子のために盡して呉れた、親芋があつたればこそである。子芋の甘しさにつけて、こゝまでに至らせた親芋の苦勞と、功績とを思はねばなりません。時に斂うなり、時に甘うなりつゝ、自ら瘠せて、腐つたの、我利々々のと、云はるゝをも顧ず、一生懸命に盡して下さるのは、親の親切である。この親切があつて、子が育つのであります。

佛は我々の親様であらせられる。我々に正覺とらせて、お悟開かせて、蓮華の御座で、莞爾笑はせたいばかりに、難作能作積苦類徳。自ら瘠せて五劫の御思案、自ら骨折つて永劫の御修行。時には唯除五逆誹謗正法と斂うなつたり、時には諸有衆生聞其名號と甘うなつたり、種々に善巧方便して、我等が無上の信心を發起せしめ給ふのである。他の諸佛方からは、物敷寄ぢや、深入過ぎぢやと、笑はれやうがまゝよ、一々誓願爲衆生故、衆生往生の願行を忍力成就して、其儘救ふぞと喚んで下さる。子芋の功名は親芋の働き。私共が今日人並の日暮の出来るのは、全く親の念力。罪業抱へたこの私

が諸佛菩薩の只中で、上々人妙好人と褒められるのは、偏に佛智不思議の遣
瀨ない御養育たることを、忘れてはなりません。